

2 学年通信

平成29年10月17日

Breakthrough

No. 7

Forgive but never forget 許そう、しかし忘れない

1941年12月8日午前3時20分(東京時間)、母艦より飛び立った航空機は真珠湾のアメリカ軍港を奇襲し、停泊中の主力艦隊をほとんど全滅させるという大戦果をおさめた。それよりもさらに、対米通牒伝達予定時間より45分も早い午前2時15分、南方ではイギリス領マレー半島に日本陸軍部隊の上陸侵入が開始されていた。(中略)機動部隊が海上で事前に発見されなかった僥倖のおかげでハワイ奇襲は成功し、マレー半島への上陸も達成された。10日にはマレー沖においてイギリスの新鋭主力艦プリンス・オブ・ウェールズ・レパルスの2隻を航空機からの空中戦により撃沈し、イギリスの極東艦隊をほとんど喪失せしめるなど、緒戦の戦果が次々とあがった。(中略)もともと中国侵略の手づまりから派生したこの戦争が、決して欧米帝国主義に対する東洋の反撃などというりっぱな口のきける戦争でないことを考えても、またいすれ戦局の逆転することの明白な見透しをもちえた人たちにとって、花々しい勝利に素朴に喜ぶ気持ちになれないのは当然であった。(中略)開戦直後は日本軍の周到に用意された作戦が順調に進み、25日には香港を、フィリピンに上陸した部隊は1942年1月2日にマニラを、南方に向かった部隊は23日にラバウルを、2月15日に落下傘部隊がスマトラのパレンバン石油地帯をそれぞれ占領、同日シンガポールの要塞も陥落した。(『太平洋戦争』家永三郎 岩波現代文庫)

シンガポールを占領した日本は、昭南島と改称し、日本統治下に置きます。1942年2月から3月末にかけて抗日華僑の摘発を行い、多数の華僑を虐殺しました。殺害人数は日本の公式見解で5千人ですが、シンガポール国立図書館は、日本人新聞記者の証言として「当初は5万人を殺害計画していたが、半分に達した所で止めた」と記しています。

1962年、日本軍に虐殺された人々の白骨が大量に発見されました。シンガポールは、慰霊のために「日本占領時期死難人民記念碑」を建設することになりました。その起工式でリー・クワンユー首相は以下のように述べました。

「過去がどんなに痛ましいものであったとしても、過去の経験にとらわれることなく、今に生き未来に備えなければならない。日本のシンガポール占領時代に亡くなったすべての民族と宗教の人を覚えていることは、過去を乗り越える過程の一部だ。

我々は忘れることはできない。完全には許すこともできない。

(We cannot forget, nor completely forgive.)

しかし、最初に魂に安らぎを与え、次に日本人が誠実に謝罪をあらわしている中では、多くの人の心にある苦しみを救うことができる。今日の式典で私が責務を果たすにあたって、この希望の中にいる。」

このリー・クワンユー氏の言葉が、現在は「Forgive, but never forget」として現在に伝わっています。本来の言葉は、伝わっているよりも強い言葉でした。現在、日本とシンガポールは友好関係にあります。日本は許されたのでしょうか。

1941年12月8日といえば、ハワイ真珠湾攻撃を思う人がほとんどだと思いますが、ハワイ攻撃よりも先にマレー半島での戦いが開始されています。1937年から続く日中戦争が泥沼化し、アメリカによる対日石油輸出禁止の決定の中、日本は東南アジアへの南進策を決意しました。日本は、東南アジアの石油やゴムなどを確保するためアメリカ、イギリスとの戦争に突入しました。シンガポールだけでなく、多くの地域で悲劇が起きました。緒戦で勝利した日本ですが、1942年6月のミッドウェー海戦以後は、戦局が転換し、アメリカの反攻が本格化していきました。劣勢になっても降伏をしない日本に対して、アメリカは1945年8月6日広島に原子爆弾を投下しました。

広島原爆死没者慰霊碑には「安らかに眠ってください。過ちは繰り返させぬから」と刻まれています。この文章には主語がありません。あなたは、主語は誰だと思いますか。また、「過ち」とは何を指すと思いますか。もし、あなたの家族が殺されたら「許そう、しかし忘れない」と言えますか。修学旅行の広島・海外研修のシンガポール、それぞれに過去があり、現在があります。歴史や人の思いを考えて有意義な旅にしてください。

東大はダイバーシティ(多様性)を必要としている

『東大生のディープな日本史』という本があります。その「はじめに」の中に次のような文章があります。「東京大学ほど「優秀な学生を集める」ということに意識的な大学はありません。東京大学の入試問題は、日本史にかぎらず、緻密な思考力を問う良問が選りすぐられています。「この問題ができるのならば優秀な学生に違いない」と、確信を持てるものばかりです。」

この本の著者である相澤 理^{おさむ} 先生の話聞く機会がありました。都会の高校の生徒は、東大を目指すのに、地方の優秀な学生は東大を目指さない。東大の問題を書籍にして出版することで、東大を受けてみようとする人を増やしたいと言ってました。東大に多数の生徒を合格させている開成高校では、卒業式で校長先生が「開成から東大に多数合格すると大変なことになる」と式辞を述べたそうです。その意味は、同質の集団からは発展が期待できないということです。地方で一人で頑張っている人は、秋にC判定であきらめてしまうのに、開成の人はE判定でも受けて合格してしまう。

東大に限らず、野心を持った学生を大学は求めています。困難と思われることに挑戦してこそその人生です。

進路講演会が行われました

「偏差値の高い大学に入っても安心できない」「社会的な問題にどれだけ貢献できるか」「グローバル社会は競争社会」「競争社会だからこと困っている人のことを考える」「自分の力で生きていかなければならない」「社会で活躍するためには好奇心と優しさ」「自分の外にある社会に関心をもとう」「志を高く持ってチャレンジする」「自分の将来を大学名では言わない」大堀精一先生の言葉をかみしめて、社会に出て行くために大学を目指してください。